

おしどり文学館協定 荒川区・福井県合同展示
第11回トピック展示

吉村昭が描いた天狗党

「動く牙」と「天狗争乱」福井の旅

会期 令和2年9月18日(金)～12月16日(水)

場所 常設展示室 2階 エントランス、著作閲覧コーナー

「尊王攘夷思想は当時、全国の有能な人々に強烈な影響をあたえたが、それは時間の流れとともに変形し、消えていった。その中で天狗勢のみは、信奉の姿勢をくずさず、それが悲劇となったと言うべきである。」

吉村昭『天狗争乱』平成6年 朝日新聞社

平成29年11月5日に、吉村昭記念文学館と福井県ふるさと文学館は、おしどり文学館協定を締結しました。この協定は、区出身の作家・吉村昭氏と、妻で福井県出身の作家・津村節子氏の「おしどり夫婦」になぞらえて締結したものです。この協定に基づき、合同展示を行います。

今回の展示では、福井を舞台とする吉村作品から「動く牙」と「天狗争乱」を紹介します。この2作は、元治元年(1864年)に起きた天狗党の乱を題材に、世の中に取り残されていく尊王攘夷派を描いた歴史小説です。



「動く牙」を収録した『磔』
昭和60年 文藝春秋



『天狗争乱』
平成6年 朝日新聞社

展示資料一覧

展示資料 4～ 8 は、吉村が調査した執筆参考資料。書斎で保管していた。 4、 6、 8 は、取材・調査のため著者を訪ねて、入手した。いずれも多くの書き込みがあり、付箋が貼られている。 6 の資料には、栃木町に現れた天狗勢の装束、人数、大平山に向かった経緯などに線が引かれている。 8 の資料では、武田耕雲斎の妻や娘たちが赤沼で入牢したことが記された箇所、赤字で「妻子」とメモした付箋が貼られている。

また、 7 の論文や、宿場の記録等を読み、天狗党と共に旅した女性の存在に着目した。資料の表紙には「女」とメモがある。女性の人数や年齢に赤線を引き、通過した地名を青色の丸で囲んでいる。赤線を引いた「市毛源七母見恵」については、「天狗争乱」で、「市毛みえ」として、女性で唯一、^{はえぼうし} 蠅帽子峠を越える経緯や、鯉蔵に幽閉された後、水戸で息を引き取る姿を描いた。

1	吉村昭「動く牙」「別冊文藝春秋」昭和49年(1974年)12月	当館蔵
2	吉村昭『磔』昭和50年 文藝春秋	当館蔵
3	写真パネル 石井左近作成「動く牙」抜刷	敦賀郷土博物館蔵 写真提供 敦賀市立博物館
4	石井左近『敦賀と水戸烈士の話』昭和46年(1971年)敦賀郷土博物館発行	津村節子氏寄託資料
5	天野俊也「水戸浪士西の谷通行と大野藩」『西谷村誌』抜刷 昭和45年(1970年)	津村節子氏寄託資料
6	稲葉誠太郎『水戸天狗党栃木町焼打事件』昭和58年(1983年)ふるんていあ	津村節子氏寄託資料
7	河内八郎「野洲における天狗党争乱(続) - 元治元年11月の通過をめぐる問題」 「栃木史心会会報」昭和61年(1986年)9月	津村節子氏寄託資料
8	関山豊正『元治元年 - 那珂湊の大戦 -』昭和45年(1970年)12月 私家版	津村節子氏寄託資料
9	「天狗争乱」に関する自筆メモ	津村節子氏寄託資料
10	「天狗争乱」に関する自筆ノート	津村節子氏寄託資料
11	吉村昭自筆原稿「天狗争乱」上	津村節子氏寄託資料
12	吉村昭自筆原稿「天狗争乱」下	津村節子氏寄託資料
13	吉村昭自筆原稿「読者からの手紙」	津村節子氏寄託資料
14	写真パネル 降伏した天狗勢が収容された鯉蔵	写真提供 敦賀市立博物館
15	写真パネル 武田耕雲斎等墓	写真提供 敦賀市立博物館
16	写真パネル 武田耕雲斎所用 陣羽織と軍扇	写真提供 敦賀市立博物館
17	写真パネル 「天狗党騒動図」	写真提供 敦賀市立博物館
18	写真パネル 大野城	写真提供 大野市

ど：かすはじめる。か。
 書き出しは大切。
 これをきめて書き出した。半ば以上は
 終ったも同じ。
 史料として。田中愿蔵隊が
 栃木町を焼く。人々を殺した。都
 府へ...
 旧家自身の「稲葉葉城大戦」
 「水戸天狗党 栃木町焼打事件」
 としてまとめた。
 これは嬉しかった。
 那珂湊の戦い。
 関山豊正代。
 「那珂湊の大戦」
 これも助った。

徳川家と幕府の... 水戸藩
 の藩士として。徳川家と倒すに
 志をたてた。
 それで幕府と戦った。
 尊王攘夷の理解をしてくれ... た
 が一掃された。ゆえに大移動。
 幕府によって大量処刑。思想
 集団の悲劇であった。
 幕府の衰えと同様に。
 水戸藩の立場が「悪化」。
 非難する声が多く。
 水戸を脱走。
 新幕府にのまれて潜伏。
 水戸の挿史にとりかえ。水戸の古田
 道達とつづける。

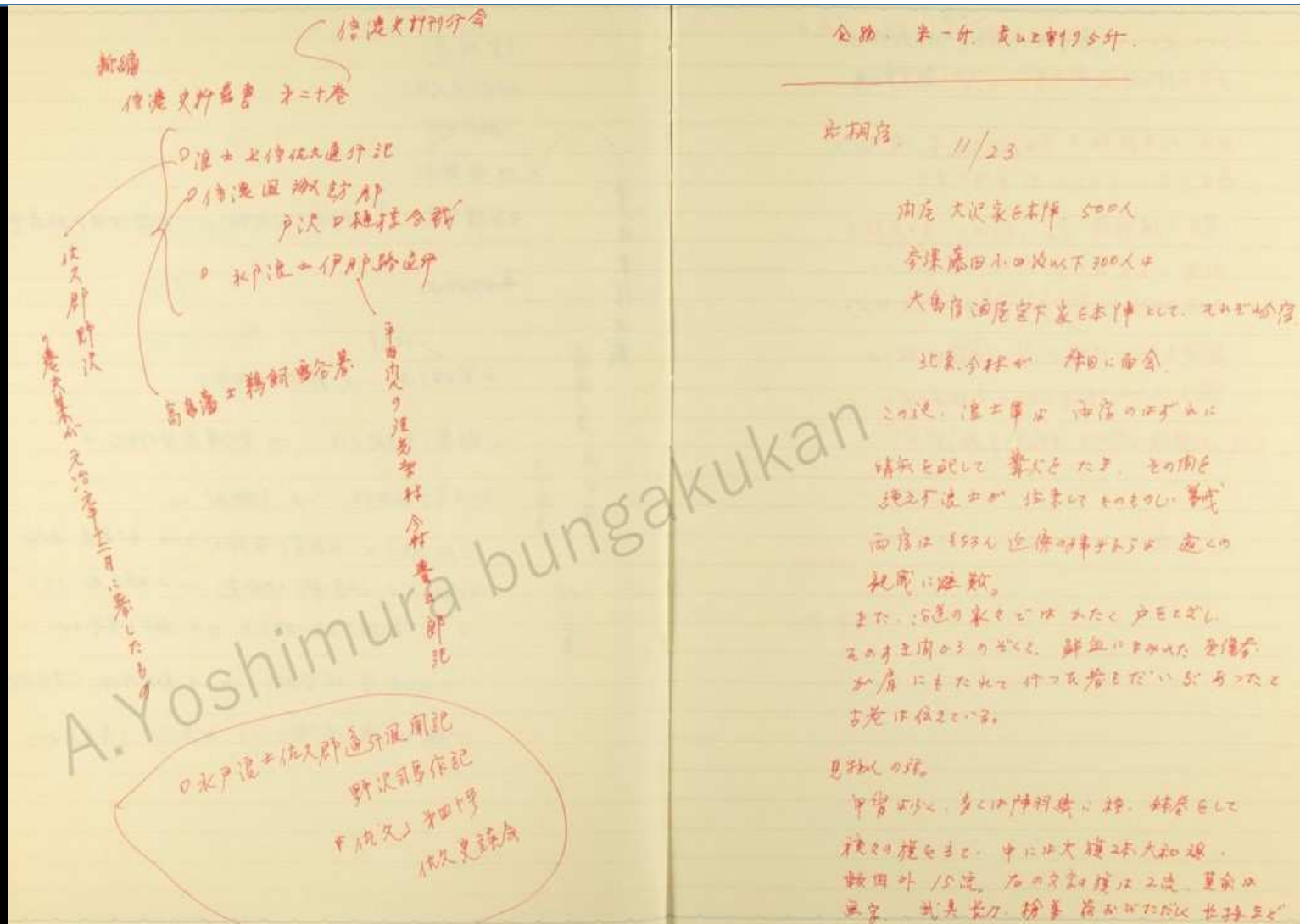
このメモに記された執筆時の参考資料、稲葉誠太郎『水戸天狗党栃木町焼打事件』（展示資料 6）と、関山豊正『元治元年 - 那珂湊の大戦 -』（展示資料 8）を、吉村は書斎で保管していた。多くの付箋や書き込みが見られる。

自筆メモ「天狗争乱」

津村節子氏寄託資料

(左)6枚目 (右)10枚

全10枚のメモ。「桜田門外ノ変」執筆後、「天狗争乱」に取り組んだ経緯や、取材・調査資料の内容、天狗勢が信奉した尊王攘夷思想について記す。左の6枚目では、書き出しの大切さを述べる。5行目以降、田中愿蔵隊の調査のため栃木町（現・栃木県栃木市）を訪れた際に、稲葉誠太郎氏と出会ったことを記す。稲葉氏の著作『水戸天狗党栃木町焼打事件』を知り、11行目「これは嬉しかった」とある。また、関山豊正『元治元年 - 那珂湊の大戦 -』について最後の行に「これも助った」とある。右の10枚目では、7行目、「幕府によって大量処刑。思想集団の悲劇であった。」と結ぶ。続けて、処刑後、「幕府の衰え」と、水戸藩門閥派の立場が「悪化」したこと、天狗勢の処刑に「非難する声が多く」集まったことを記す。

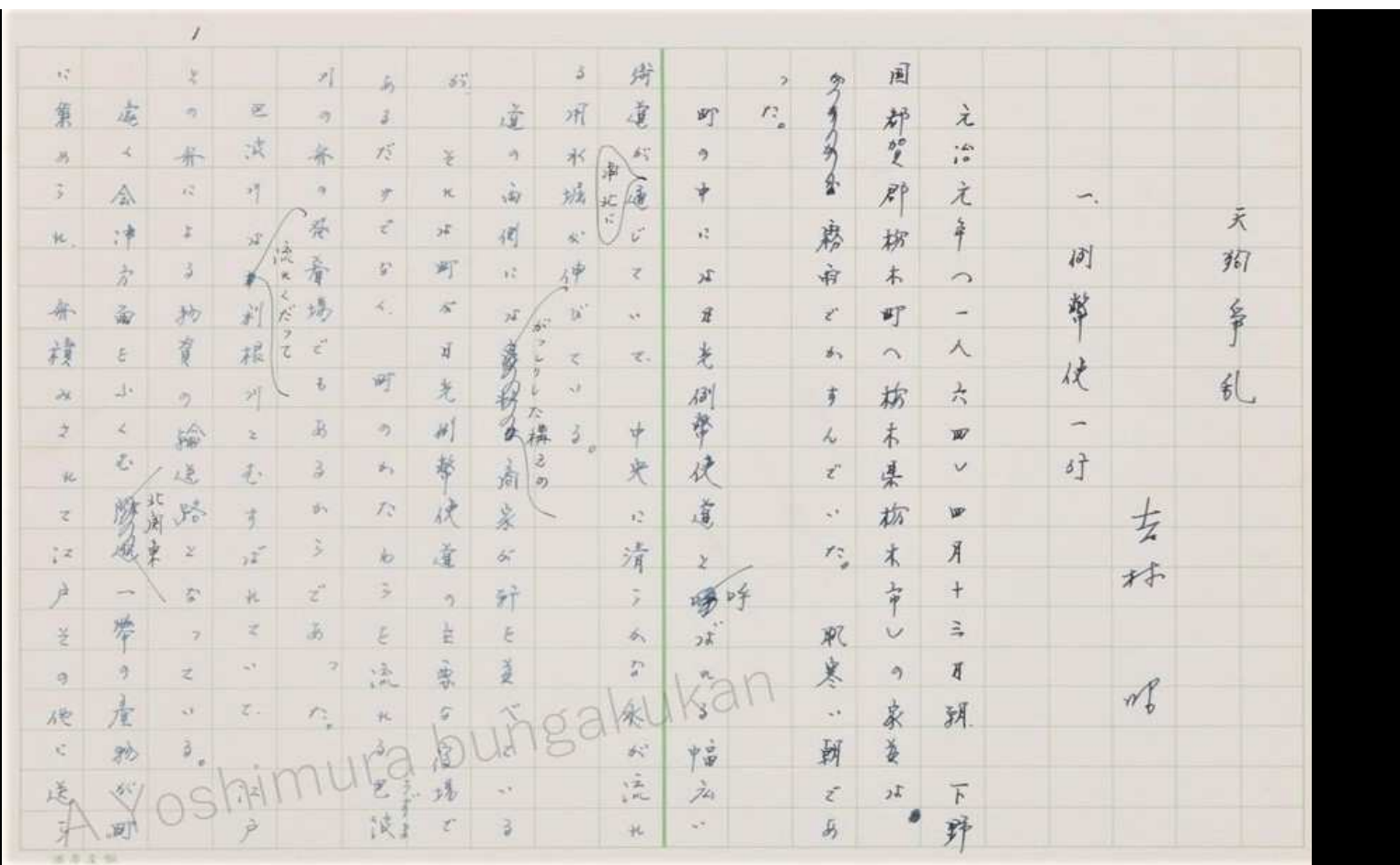


「天狗争乱」に関する自筆ノート

津村節子氏寄託資料

取材や、資料調査の内容を記録。「天狗争乱」についての記述は、12頁ある。

左頁は、使用した参考資料のタイトルを記録。右頁には、片桐宿での天狗勢の様子をまとめている。下から5行目、「見物人の話」とある。甲冑は少なく、「陣羽織に袴、鉢巻」をして、旗を立てて移動する様子を書き留めている。



自筆原稿「天狗争乱」(上)

津村節子氏寄託資料

原稿1枚目。

吉村は、原稿を上下巻で製本して保管していた。



製本して保管した自筆原稿の背表紙。

1・昭和49年「動く牙」発表 福井・大野・敦賀取材の旅

昭和49年(1974年)12月、吉村昭は歴史小説「動く牙」(「別冊文藝春秋」第130号 文藝春秋)を発表しました。元治元年(1864年)に起きた天狗党の乱、その終焉に焦点を当て、現在の福井県大野市と敦賀市を舞台に描いた作品です。小説の前半は、豪雪の難所である蠅帽子峠を越えて美濃から侵入した天狗勢と大野藩の攻防が綴られています。後半は、新保から敦賀を舞台に、加賀藩に降伏した天狗勢352名が幕府によって処刑されるまでを描いています。

この作品を執筆したきっかけは、昭和40年頃、敦賀を旅した際に、水戸浪士の墓を見た体験でした。その後、『西谷村誌』(昭和45年 大野市)など、大野藩に侵入した天狗勢の記録を調査した吉村は執筆を決意し、福井で取材を行いました。

まず、福井県立図書館で資料を調査した後、天狗勢が加賀藩と対陣した敦賀の葉原^{はばら}、新保^{しんぼ}を訪れました。新保では、武田耕雲齋らが宿泊した本陣がそのままに残されており、同じ部屋に座った吉村は、武田らの姿を想像し「事実あった事件」であることを実感したと述べています。また、敦賀では、天狗勢が斬首されるまで幽閉された鯁蔵^{にしんぐら}や、武田耕雲齋の墓を訪れ、資料を収集しました。さらに、大野では、藩命を受けて天狗勢と交渉した布川源兵衛の子孫など、ゆかりの人物に取材し、雪深い蠅帽子峠^{はえぼうし}を車で訪れ、足跡をたどりました。入念な資料調査と、取材を通して得た強い実感をふまえて、天狗勢の悲劇的な最期を描いています。



降伏した天狗勢が収容された鯁蔵
写真提供 敦賀市立博物館
展示資料 14
昭和40年頃、初めてこの場所を訪れた吉村は、「異様な感じを受けた」と述べている。



武田耕雲齋等墓所
写真提供 敦賀市立博物館
展示資料 15



「動く牙」に登場する雪の大野城
写真提供 大野市
展示資料 18

2・平成4年「天狗争乱」連載開始 天狗党の悲劇を描く

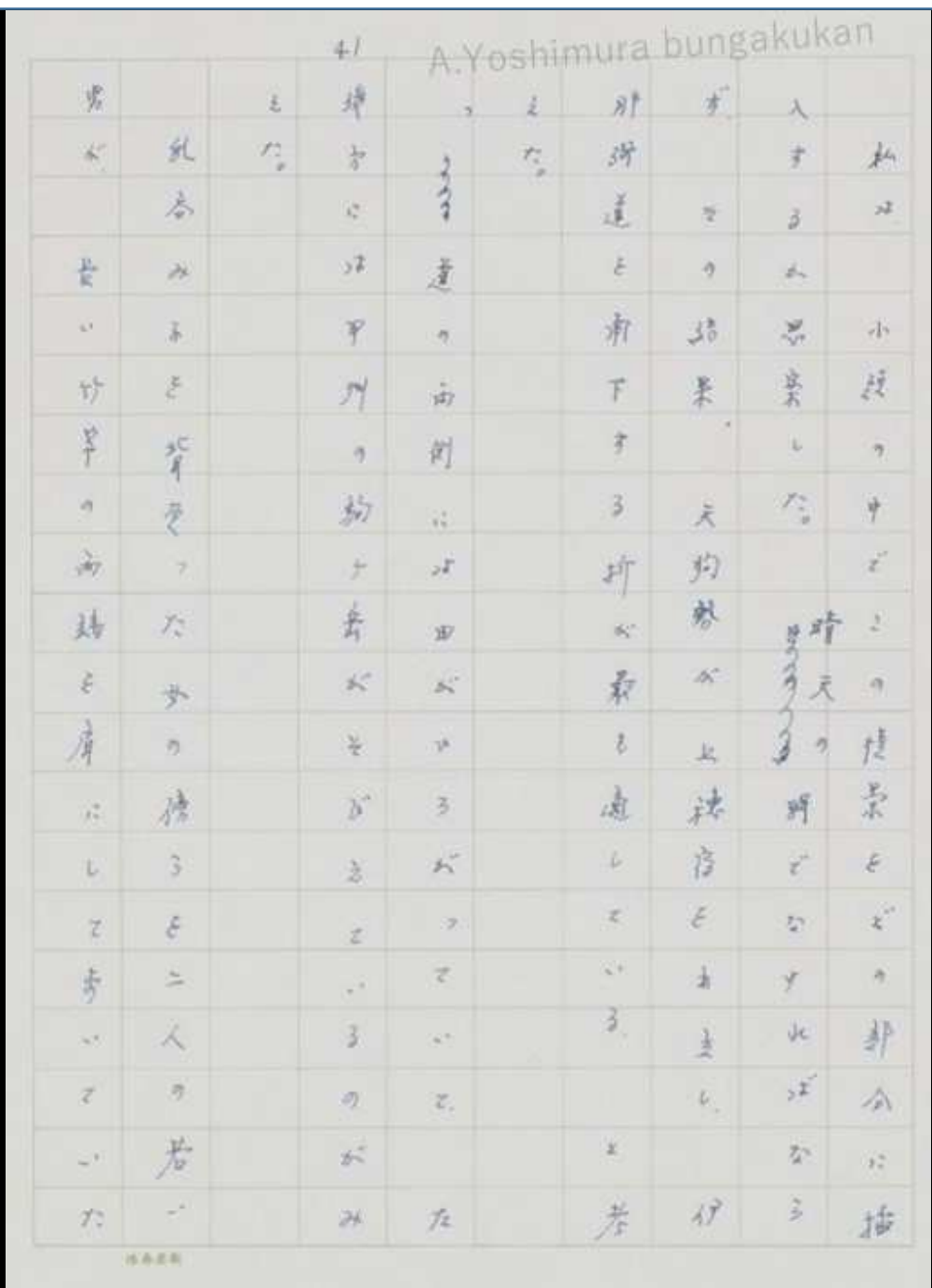
平成2年(1990年)、吉村は、水戸脱藩浪士による大老井伊直弼暗殺事件を描いた『桜田門外ノ変』(新潮社)を刊行しました。かねてより、水戸で興った尊王攘夷思想を、より深く理解するためには、この事件の後に起きた天狗党の乱を書く必要があると考えていたことから、「天狗争乱」の執筆に着手します。「動く牙」では、天狗勢を捉えきることができなかつたと感じていたこともあり、更なる徹底した取材と調査を行いました。栃木、那珂湊、水戸、筑波、宇都宮、長野、大垣、岐阜、金沢、敦賀、福井、大野など天狗勢が通過した各地を取材し、郷土史家や研究者と出会い、収集した資料を丹念に調査しました。そして、天狗勢の田中愿蔵隊が、栃木町を襲った事件から書き出すことを決め、平成4年10月から1年にわたり、朝日新聞で連載しました。尊王攘夷を掲げて筑波山で挙兵した天狗勢が、幕府の追討軍と戦いながら、水戸藩元家老武田耕雲齋を総大将に、下級武士、一般農民を含む千余人もの大集団となって、敬慕する徳川慶喜に志を訴えるべく、京を目指して下野、上野、信濃、美濃を経て、越前に至る過程と、敦賀で迎えた最期を克明に記しました。大幅な加筆改稿を経て、平成6年に単行本を刊行し、第21回大佛次郎賞を受賞しました。

吉村は、「社会思想は時代の変化とともに変貌する宿命をもつが、天狗勢はそれを意識することなく行動し、そこに天狗勢の悲劇」があり、「その悲劇をえがきたかった」と述べています(「天狗勢と女」「新潮」平成6年7月特大号 新潮社)。厳しい軍律の元に、秩序正しく進む天狗勢の姿を掘り下げ、各地の人びとが感じた恐れと共感、慶喜と幕府の思惑、加賀藩はじめ、各藩が抱いた悲痛な思いを浮き彫りにしています。また、藤田小四郎や武田ら中心人物とともに、天狗勢に参加した浪士の妻や炊事を担当した女性たちの存在にも着目し、それぞれの背景や心情を浮かび上がらせています。尊王攘夷を信奉し、倒幕へと変貌した思想を意識することなく、世の中に取り残されていく天狗勢の悲哀と末路を描き出しました。

3・読者からの手紙 各地の伝承と郷土史家との連携

吉村は、取材先で出会う郷土史家や研究者、また、各地の伝承や参考資料を手紙で知らせる読者との関わりを大切にしました。「動く牙」と「天狗争乱」の取材では、各地の研究者や郷土史家を訪ね、話を聞き、資料を収集しました。これらの書斎で保管されていた資料には、付箋が貼られ、重要な箇所には下線が引かれています。また、地名や人物を丸印で囲み、関連する事柄を書き込むなど、読み込んで使用していたことが窺えます。

「天狗争乱」の連載時、吉村の元には、天狗勢が通過した各地に暮らす読者や、登場人物の子孫など、多くの読者から手紙が届きました。その数は、それまで発表した歴史小説の中で最も多いものでした。吉村は、手紙を書斎で保管し、礼状や返信を送りました。記述の誤りを問う指摘には、根拠とした資料のコピーを送ることもありました。このような読者との関わりについて、「郷土史を研究する人との連携を感じる」として「お互いに誤りをただし合い、正しい史実を残したいと思う」と述べています（『読者からの手紙』『史実を歩く』平成10年 文春新書）。中でも、天狗勢に同行した女性や乳児の伝承を記した手紙は、吉村に衝撃を与えました。それは、和田宿を出発した隊員たちが掲げた指物のほとんどが「襦袢^{おむつ}」だったという話でした。吉村は、自らが調査した資料を検証した上で、この伝承の価値は高いと判断し、文庫化の際に加筆しました。「小説の密度」が高まったと記しています。



自筆原稿「読者からの手紙」

(右) 41 枚目 (左) 42 枚目

津村節子氏寄託資料

『史実を歩く』（平成10年 文春新書）所収。天狗勢が通過した各地の郷土史家や伝承を受け継ぐ子孫からの手紙を紹介した随筆。

女性や乳児もいた天狗勢が、和田宿を出発した時に掲げた旗指物は、ほとんどが「襦袢（おむつ）」だったという伝承を知らせる手紙を受け取り、「天狗争乱」文庫刊行時（平成9年 新潮文庫）に加筆した。矢印の部分では、加筆箇所を熟考した経緯と、加筆したことで「小説の密度がたかまった」ことを記している。